



Title	太宰治『正義と微笑』における引用に注目して
Author(s)	田中, 帆南; Tanaka, Honami
Citation	研究論集, 22, 39 (右) -51 (右)
Issue Date	2023-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.r39
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87875
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_rjgshhs_22_p039-052_r.pdf



太宰治『正義と微笑』における引用に注目して

田中帆南

要旨

『正義と微笑』は、「僕」の「青春」や成長過程における内的変化であり、太宰自身や時局との関連性の中で読まれてきた。また、タイトルにもなっている「微笑もて正義を為せ!」という「モットオ」の解釈自体、十分に行われていないと言える。本稿は、作中に散りばめられた聖書の引用に注目し、「僕」の出来事や考え方と聖書の相互的な関係性を指摘し、先行研究で論点になっている「僕」の「モットオ」が、晩年の作品『人間失格』まで見られる「道化」を示していることについて考察する。

本作品は堤康久の日記を基礎とし、聖書等の引用が多く見られる「僕」の日記の形式をとっている。聖書は、日記を豊かにするための副次的な要素ではない。このことは作品に見られる断片性と結びつき、『正義と微笑』全体から統一的な主義主張を回収できないと結論づけられる。

また、「道化」は俳優という職業と密接に関わっている。これが最終的に「僕」の「創造の技術」になると言える。本作品は、結末で作中の「僕」が至る「道化」というあり方をタイトルで示していた。だが、それ以外を読み取ることは読者に大きく譲られているところである。

はじめに

「正義と微笑」は、一九四二年六月に「新日本文藝」に発表された。

「正義と微笑」は、青年歌舞伎俳優T君の、少年時代の日記帳を読

ませていただき、それに依って得た作者の幻想を、自由に書き綴った小説である」とある「あとがき」や、堤重久『太宰治との七年間』（一九六九・三、筑摩書房）からわかるように、堤重久の弟、堤康久の日記が基となっている。

まずは先行研究を概観してみよう。

濱田千春は、太宰自身が「中期」に「徹底した「生活人」として生きることをめざした」とし、それが作中の「僕」にあたるとして、この小説を自伝的に読んだ。島田昭夫は、執筆当時の「時代の流れに逆行する」生き方が描かれており、そのように生きる「僕」は「太宰が好ましいと考えた一つのタイプ——生活信条の体現者であった」と主張する。西田りかは、「生活人」への変貌の過程」を描いたものだとし、「自己を発見する手段」として芹川は役者、太宰は小説家を選んだと述べた。安藤宏は、「自己の統合をめざす運動が展開されてゆく」点で「近代的」な日記と同系統にあると述べた上で、「他の誰とも違う自分」を内省的に突き詰めてゆこうとする近代日記の「文学性」を内側から解体してゆく結果を示している」と主張した。勝原晴希は、俳優として出発した「僕」は「翼をなくした地上の天使」であり、本作品は、「道化から俳優への路をたどる少年の姿を重ねて、楽園を喪失し地上の生を余儀なくされた者が、その宿命を自らに引き受けるに至る姿を描いた小説である」とする。廣瀬晋也は、聖書の引用に注目し、「身体、または身体表現と密着した形で自己表現の出発点としての信仰に出会うまでの時間」が書かれた作品だと位置づけた。萬所志保は、「他者」が内在する「自己確立」の経過が書かれていると結論付ける。そして、「一青年の青春像」だけではなく、「民衆と時局という対立構図」をもあぶり出した作品であると述べる。吉田咲は「モットオ」を中心に分析し、その二面性と国策のパロディとしての可能性を提示した。片

木晶子は「戦時下の学生生活」の中で成し得ない、「本来あるべきはずの生き方を提示し」た作品であると評価した¹⁰。

先行研究においては、そのほとんどが、本作品の主題を「僕」の「青春」や成長過程における内的変化とし、それと太宰自身や時局との関連性の中で読んできた。また、吉田を除いては「僕」の「モットオ」である「微笑もて正義を為せ」の解釈自体、十分に行われていない。本稿は、「正義と微笑」というタイトルにもなっている「僕」の「モットオ」と、作中に散りばめられた聖書の引用から出発し、本作品における引用のあり方やその効果を中心に考察する。

一 引用

本作品は、「僕」が四月十六日から翌年の十二月二十九日までの日記の形式をとっている。初日に「僕」は、「自分の一日一日が、なんだか、とても重大なものやうな気がして来た」ため、そして「人間は、十六歳と二十歳までの間にその人格がつくられる」ために日記をつけはじめると述べる。また、「わが混沌の思想統一の手助け」、「わが日常生活の反省の資料」、「わが青春のなつかしい記録」というこの日記を書く目的を三点挙げている。いずれも日記を書く理由として奇異なものではないが、ここから、青年期にある「僕」の「思想」を含む日々の記録を書いていくことが表明されている。

「思想」と言えば、堤康久の日記にあったマルクスの思想が、キリスト教に置き換えられたのは有名な話である。本作品に日記が活用

されるにあたって、聖書の引用が多く見られるものへと改作された。

『対照・太宰治と聖書』（鈴木範久・田中良彦編、聖公会出版、二〇一四・六）は、『正義と微笑』のみならず、「創生記」や「HUMAN LOST」、「風の便り」、「ろまん燈籠」、「きりぎりす」、「駈込み訴へ」、「惜別」、「桜桃」、「父」、「斜陽」、「人間失格」、「パンドラの匣」などの作品や太宰自身の書簡から、聖書の言葉が用いられている箇所を抜粋し、それらと聖書を照らし合わせている¹¹。以下で、聖書の引用を確認する際にはこれを参照した。本作品においては、冒頭の初日にも結末の最終日にも、断食についてマタイ伝が引用されている。さらに、「僕」の日記とされるこの作品が「さんびか」で始まり、「さんびか」で終わることも見逃してはならない点である。このような冒頭と結末の問題については後で言及することにし、本節では、日記全体で引用がどのような状態でなされているか確認していく。「僕」が日々の出来事を書き綴っていく中で、引用を用いた箇所をいくつか挙げてみよう。

初日と最終日に見られるマタイ伝の引用に関しては、一九章二三〜三〇節にある「富める者の神の國に入るよりは、駱駝の張の孔を通るかた反つて易し」は、受験の失敗から生じた「僕」の「有閑階級はいやだ」という嫌悪と重ねられている。そう思うに至った経緯は明確に書かれていないが、一高の入学試験の不合格を受けて、今後どうするかを考えた結果として「自活」を思いついたのだろう。「僕」の家庭は、父が不在であっても経済的に余裕のある「富める者」であり、聖書の文句がそれと重ね合わされたことは明らかである。

田中 太宰治『正義と微笑』における引用に注目して

聖書の文脈での宗教的な意味はここでは失われている。五月十一日の日記に引用されているのは、「傳道之書」九章七〜一〇節に該当する「凡て汝の手に堪うる事は力をつくしてこれを為せ」や、マタイ伝二六章四二節の「御心のままになし給へ」だが、ここでも同じことが言える。鷗座に行くのではなく「プロフェツシヨナル」に生きるべく、斎藤先生に次の劇団を紹介してもらった「僕」の意気込みと接続させられている。

作中の引用を全て取り上げていきりがない¹²。友人の佐伯に五円返済しなければならぬとき、古本を売るか兄に頼るかで悩んでいた「僕」は、「汝の兄弟より利息を取るべからず」という引用から、「兄さんにたのむのが安全らしい」と結論を出す。これは、『申命記』二三章一九節〜二〇節からの引用であった。あるいは、四月二十一日の日記はどうだろうか。キリストが「アバ、父よ！」と叫んだというマルコ伝一四章三二〜三四節と、「母のあいより なのもあつく 地のもといより さらにふかし ひとのおもいの うえにそびえ おおぞらよりも ひろらかなり」という「さんびか第五一」の引用がある。これらは、「なんだか非常に大きくて、あたたかい」父を思い浮かべる「僕」の思考に合わせて引用されたものである。このように、日記を書いているとされる「僕」は、聖書の元の文脈は考慮せずに、出来事や考えに合わせてその引用文を利用してゐる。劇団に入る試験の際に「失礼ですけど、ファウストがよくわかりますか？」と尋ねられ、「ちつともわかりません」と答えることから、「僕」のあり方はうかがえるだろう。堤康久の日記にあった

マルクス主義の思想は削除されたが、代わりに取り入れられたキリスト教の要素は、思想というレベルのものではない。本作品に限らず、太宰作品においては、佐古純一郎の指摘する¹³ ような、キリスト教の思想が思想というレベルで描かれることが主たる目的であるといったことはおそらくない。あとで指摘するが、本作品ではむしろ、そうした一義的な主義・主張を読み取ることが拒まれている。

ここまで確認してきたのは、「僕」の日記に引用されている聖書がどのようなものであった。「僕」が出来事や考えに、元の文脈を考慮せず、恣意的に聖書を重ねることと、「僕」の日記にあたる箇所は、ジュネットの言うところの「拡張」という作業が行われていると言える¹⁴。「テキストの拡大」の第一のタイプである「拡張」は、「全面的付加」と説明されており、同じ章の中で、「二つ（あるいはそれ以上）のイポテキストをさまざまな割合で混ぜ合わせることは、伝統的な実践であり、詩学ではこれを、正当にも混交 *contamination* という用語で呼んでいる」と述べられる。このことが実在の日記と聖書等の引用を用いる本作品に当てはまるということだけでなく、「混交」による聖書の引用は「僕」の日記を引き延ばしていることも指摘できる。さらに、出来事や内面が記される「僕」の日記の部分は、引用が「僕」の言動が重ねられている点で、次に言及する「膨張」が施されているとも評価できる。本作品における「拡張」の効果は、R大学に合格するほどの知識を持った「僕」という青年の日記としての本物らしさを仮構することができるところにあると考えられる。青年の心理が書かれたものであると評価する先行研究は、こう

した作品の作られ方の巧妙さを示す証拠である。

しかし、以上のことを指摘する際に適用される、『正義と微笑』¹⁵ 「僕」の日記という見方のみが本作品の構造のすべてではない。『正義と微笑』は堤康久の日記を基に、その形式とその内容を拝借している。「僕」の日記ではなく、「僕」の日記という形式をとって、それを基盤としたりえで、聖書等の引用が含まれた作品として作られていることを踏まえるべきだろう。すなわち、日記部分と聖書は前者が一方的にという形ではなく、互いに引用し、引用されるといった相互的な関係性なのではないだろうか。聖書の引用は、作品において、「僕」による文章を「拡張」させる副次的なものではない。元の文脈から切り離された部分的な引用も、「僕」が書いたとされる日記形式の中で、青年の日記らしさに貢献しながら、その引用自体は活用可能性を広げられていると評価できるだろう。引用されたものは、元の文脈から離れることで、そこでの意味を剥奪されてしまいが、そこでの言葉が本来持つ意味形成の力を発揮させられている。作中に引用されることで、聖書には、ジュネットの言う「膨張」の一種がなされていると考えられる¹⁶。「膨張」は、「細部を膨らませること、描写すること、エピソードと脇役を増やすこと、それ自体はほとんど劇的ではない冒険を最大限に劇的なものとする」と¹⁶であり、「拡大の第二のタイプ」である。上記で述べたように、聖書は「僕」の出来事や思考と重ね合わされている。一方で、「僕」によって、聖書は「僕」によって「膨張」させられているとも言える。「新約を読んでも、キリストは、病人をなほしたり、死者を蘇

らせたり、さかな、パンをどつさり民衆に分配したり、ほとんどその事のみ追はれて、へとへとの様子である」と書かれる五月十一日の記述は、一四章一三〜二二節や一五章三四〜三八節、さらにヨハネ伝一章三九〜四四節が参照されている。マタイ伝を確認したとき、当然のことではあるが、引用元でキリストが「へとへとの様子である」という記述は見られない。複数箇所確認される、キリストが民衆に対して施しを与える様子から、「僕」は聖書のキリストに「へとへとの様子」という描写を加えたという点で、元の文脈に「文体的膨張¹⁷」を施している。ジュネットが例に挙げている「哀れな子羊¹⁸」よりも小規模だが、これは紛れもなく「膨張」の一種であると言える。「さすがのモーゼも顔をしかめて、こいつはいけねえ、と言つたであらう」と述べられる『申命記』一四章三〜二二節の引用も同様である。

本作品は、堤康久の日記と聖書を基礎として成立していることは明確だが、二者のどちらを重視し評価するかは程度の問題であろう。一方的な影響関係ではないことは、本作品の作られ方を理解するにあたって見逃してはならない要素である。

二 断片性

では、この相互的な関係性から、作品が何を示しているのか決定づけることはできるのだろうか。結論から言ってしまうと、統一的な主義や主張を読み取ることはできない。「僕」の大学受験の苦悩

と失敗やR大学での出来事、俳優になるまでの道中、姉の離婚騒動などが書き込まれている。「僕」の俳優人生を除いて、これらの出来事はひと段落していく。だが、本作品には、発展せずに未完結の状態で配置されたり、置かれた理由が明確ではなかったりする出来事や物事が含まれている。

母の「きやうだい仲良く、——」という言葉は、作中に幾度も見られるために印象に残りやすいが、なぜ書かれているかは不明である。五月十日、兄と「たべものの中で、何が一番おいしいか」といった内容の「とてもつまらぬ議論」をした際に、「バイナツプルの鐘話の汁にまざるものはない」と結論づけられ、二人で「おむすびを作つてたべた」ことが書かれる。鷗座の合格通知を受け取っても「不思議なくらゐ、平静な気持であつた」とこと関係づけられ、「ニヒルと、食欲と、何か関係があるらしい」と付け加えられているが、実際こゝういった因果関係はあるのだろうか。無理に関係づけられているように受け取れる。杉野さんの兄への恋や、斎藤先生の秘書兼女中の女の「僕」への恋慕の真偽、九十九里で静養することになる母の病状について、そして兄の小説が完結することなく中断することも例として挙げられるだろう。十月一日、初舞台が終了した日の夜、「家へ帰つて、午前一時頃まで、兄さんを相手に、夢中で天体の話をした。なぜ、天体の話などをはじめたのか、自分にもわからない」とあるように、以上に挙げたものを作品の中でどのように位置づけることができるのかはわからないのである。

この作品は日記の形式をとっているが、日記は本来、非統一的な

日々の出来事が書かれる。様々な出来事が脈絡なく取り入れられているのは、日記としての本物らしさという作品の形式に寄与しているのではないだろうか。それとともに、統一的なメッセージや主題を追求しないスタイルであっても、小説として成立するという意図が含まれている¹⁹。このことから、本作品を青年の日記としてではなく、そうした形式をとった、読者の作品への介入を促すモニタージュ的な小説、「葉」の系譜として位置づけられる²⁰。冒頭にある「正義」といった「僕」の「思はせ振り」²¹な言葉によって、読者は読み進める中で各々解釈への欲望を掻き立てられる。読めば読むほど、断片の集積であることが明示的である「葉」に対して、『正義と微笑』は「僕」という青年の日記として認識されやすく、その断片性はある意味では隠されているとも言える。

これを踏まえて、前節に再度目を向ける。先ほど、堤康久の日記とあらゆる引用が交雑しており、それらに相互的な影響関係があることを指摘した。ただし、作品全体として解釈や意味づけを決定することができない以上、これらがどのような関係性にあるかどうかを具体的に述べることはできないということになる。そうであっても、素材としての日記や聖書は、互いの存在によって元の文脈から解き放たれている。一義的な意味が付与できない作品の中で、読者はこれらの意味付けを権利として享受することができる。あらゆる引用と「僕」の日記の相互的な戯れによって、読者に解釈されることを促す形をとっている。そしてこれが、日記そのものが持つ自閉性を打ち破り、本作品を小説としての受容を成り立たせる要素にも

なっている。

三 「微笑もて正義を為せ」II「道化」

作品全体から唯一の解釈を導くことができないとはいえ、「僕」の人物像には、太宰の代表作とされる『人間失格』まで受け継がれる「道化」の側面が見受けられる。それは初日の日記から確認される。初日の日記はタイトルにもなっている、「微笑もて正義を為せ!」という「モットオ」とその由来が書かれる点で重要である。これは、マタイ六章の一六節以下を兄に読んでもらったことをきっかけに作られたもので、十月一日の日記にも再び登場する。この断食のエピソードは、他の太宰作品にも多く取り上げられている²²。「微笑もて正義を為せ!」の解釈については、次のような先行研究がある。濱田は、「正義」は「地上的な正しさ」であり、「むずかしい人生問題」に「微笑」して「戦つていこう」という主人公の姿勢」は「太宰自身の、主体を賭けた姿勢である」という私小説的な読み方をする²³。島田は「僕」が「自活」を目指す中での「内的葛藤と苦悩」が日記では書かれているが、「正義と微笑」は「そうした主人公のいじらしい戒律」であると述べる²⁴。廣瀬は、「正義」について「自己の肉体の本然に忠実な行為の実現のことば」であり、「神の「義」」を念頭においた上で、「現実的な目下の問題に対処して「真面目に生き」ること」を指すとする²⁵。また吉田は、「正義」が「学校制度」という「自分に都合の悪いものを排除すること」から、「貧しい人」への「ひ

とりよがりの「愛」が要因で、「貧しい人を救うこと」と「俳優志望」へ変容していくことを指摘し、「正義」を「他人の称賛を得て、精神的に優位に立ちたいという、自己中心的な正義」、「微笑」を「自己中心主義を隠蔽するためのもの」であると主張した²⁶。「正義」が何かということが中心に論じられてきた中で、「正義」と「微笑」それぞれに解釈を施し、「僕」が目指していく俳優と、「正義」と「微笑」との関係性に触れている。しかし、「僕」は「学校制度をなくす」とまでは言っていない。「僕は、これから戦つて行くんです。たとへば、学校の試験制度などに就いて、——」と言っているが、これは翌日四月十七日の日記に「僕のこのごろの憂鬱は、なんの事は無い、来年の一高受験にだけ原因してゐるのかも知れない。ああ、試験はいやだ」とあることや、四月二十日に「無試験の学校へはいりたい」とあること、五月三十日に受験のための参考書を買ひそろえたことなどからうかがえるように、単に受験に向けて勉強しなければならぬないことが述べられている。

ここで指摘したいことは二点ある。一点目は、この「正義」や「微笑」が具体的に何を指すかを検討する必要は必ずしもないだろうということである。

「なんぢら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは断食することを人に顕はさんとて、その顔色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは断食するとき、頭に油をぬり、顔を洗へ。これ断食することの人に顕

田中 太宰治『正義と微笑』における引用に注目して

れずして、隠れたるに在ます汝の父にあらはれん為なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。」

微妙な思想だ。これに較べると、僕は、話にも何もならぬくらるに単純だった。おつちよこちよいの、出しやばりだった。反省、反省。

「微笑もて正義を為せ！」

いいモットオが出来た。紙に書いて、壁に張つて置かうかしら。ああ、いけねえ。すぐそれだ。「人に顕さんとて、」壁に張らうとしてゐます。僕は、ひどい偽善者なのかも知れん。よくよく気をつけなければならぬ。

ここで「単純」とされているのは、受験勉強と向き合うにあつて、兄から「でも、そんなに毎日、怖い顔をして力んでゐなくてもいいぢやないか」と言われるほどに、「異様に深刻らしい」表情をしている「僕」の様子を指している。兄が言っているのは、「僕」にとつて受験は痩せてしまうほどに重大なものだろうが、せめて「怖い顔」だけでも和らげたらどうだということであり、そのためにマタイ伝を紹介したのである。先ほど言及したように、ここでは元の文脈は考慮されておらず、そのエピソード自体が「僕」の状況に合わせて利用されている。聖書で示されているのは、周囲の人々が断食していることを知らなくても、神のみが知っていれば良いのだという思想である。他方で、「僕」は受験の重さを顔に出してしまうことと重ねて、独自の解釈を行い、「微笑もて正義を為せ！」（「正義は正義

を行うような表情でするのではなく、正義を行うという行為に合致しないような微笑をもって行うべきだ」という「モットオ」をつくり出す。「僕」がマタイ伝の引用から読み取った「微妙な思想」、すなわち本来一致するもの不一致への志向は、「正義」と「微笑」という言葉によって隠されてしまうが、これこそが本作品に見られる「道化」である。そうあることに重点があるため、ここでの「正義」はある言動などを指し、「微笑」は、そうした「正義」に伴わないものという程度の解釈で良いのではないかと考えられる。「正義」という言葉を見ると強い信念を感じざるを得ないが、ここでの「正義」は文字通りの正義ではない。先行研究で言えば、「いじらしい戒律」と称した島田の指摘に近いものであろう。「自立的な生活（主人公の言葉では「自活」）を求めての進路選択であり、その内的葛藤と苦悩とが「日記」を埋めていくことになる²⁷」といった「僕」への理解は再考の必要があること、そして「道化」への意識は、当初人物ではなく書き手としての「僕」にあったことは注意しなければならぬ。これが二点目である。以上の「モットオ」は、日記の中で行動する人物としての「僕」が志す行動指針として捉えるだけではなく、書き手としての「僕」のものでもあるということを念頭に置かなければならないのではないか。そこに書かれた人物とその書き手とを完全に一致したものではなく、分裂したものと見る見方をするとうだろうか。

四 俳優となる「僕」Ⅱ「道化」となる「僕」

人物としての「僕」は、端的に言えば素直である。梶に馬鹿にされたときは「スポーツマンだったら、恥ずかしく思へ！」と言って梶を殴り、チョッピリ女史に出されたカステラは「カステラ？ いただきます」と言って「むしやむしやたべ」、ライバルの滝田輝夫に「芹川さんは、いつも、憂鬱さうですね」と言われたときは、「あつちへ行け！」と怒鳴ってしまう。「微笑もて正義を為せ！」を実行する「道化」的な「僕」は見られない。

だが、「僕」は、他でもない「僕」によって「道化」として自覚的に行動したように書かれる場面がある。言い換えれば、書き手の「僕」は、「モットオ」を実行できない「僕」を「道化」とすべく語る。梶と喧嘩した翌日、「わが友の、笑つて隠す淋しさに、われを笑つて返す淋しさ。」と謝った場面がそれにあたる。笑つてはいてもそこには「淋しさ」が隠されており、その笑いによって、そこに見られない「淋しさ」を示していると理解できる。この「淋しさ」は、初舞台後の「淋しさ」と同種のものであると考えられる。だが、こうしたものが随所に見られるわけではない。顕著に見られるのは、結末付近にある十月一日の日記である。

俳優という職業について、吉田は「微笑」の意味は、主人公が「日本一の俳優」をめざすようになって、より意義深いものになる。俳優は、ある役割の仮面をつけ、素顔であるかのように振る舞うのが仕事である」と述べ、「正義」と「微笑」の解釈に結び付けた²⁸。自

分ではないものを装うという点で、俳優という職業自体も、ここでは「道化」の要素として活用されていると言えよう。「役者は、いやだ！」という「道化」としての「僕」の「苦しみ」は、「ほんの一瞬間」のものであった。「淋しさだけが残った」後、冒頭で兄に紹介された、マタイ伝の断食の引用を思い出すことによって、「僕」は「創造の技術さへ、僕には未だおぼつかない」と思うことになる。ここからの日記は短く、簡潔なものが主となる。大阪や名古屋での地方興行が始まり、本格的に俳優業に身を投じている。年末の帰省で東京駅に着いた「僕」は、「すれちがふ人、ひとりとして僕の二箇年の、滅茶苦茶の努力には気がつくまい」と書く。これはまさしく、断食のエピソードから得た「モットオ」に合致する姿なのではないか。

次にある十二月二十九日の日記で「僕」の日記は終わる。春秋座の総会で「脚本選定その他、座の方針を審議する幹部直属の委員」に当選し、年明けのラジオ放送の朗読を一人で引き受けることになった「僕」は、俳優として順調であると言える。華々しい成果にもかかわらず、「僕」は「自惚れてはいない」と冷静さを示している。この日の日記には、「己れ只一人智からんと欲するは大愚のみ」という「ラ・ロシフコオ」の言葉、「磐の上に、小さい家を築かう」という聖書、「わがゆくみちに はなさきかをり のどかなれとはねがひまつらじ」という「さんびか第三百十三」の引用が見られる。二つ目は、マタイ伝第七章二四〜二七節からの引用である。聖書では、神の言葉を聞いて実行することが説かれている。しかし、聖書を読んで導き出せることは、神のいうことに従うべきだということ

だけではない。砂の上に家を作ることの対比であることに注目すると、頑丈な土台の上に家を築くべきだという単純な読み方もできる。

ここで、「僕」の基盤の希薄さに言及しておきたい。四月十九日の日記に、宗教と信仰について考えを巡らせるが、そこでの「僕」は「不合理なるが故に、「信仰」の特殊な力、——ああ、いけねえ、わからなくなつて来た。もう一遍、兄さんに聞いてみやう」と、思考を中断させている。また、兄は「弟は、ひどく苦しくなると、きまつて、映画俳優になろうと決心するらしいんです」や「いのちの瀬戸際になると、ふつと映画俳優を考へつくらしい」と言っていたが、俳優を目指すきっかけも自分の内面が起源ではない。「俳優」の文字が初めて見られるのは五月十二日の日記で、「家を飛び出して、映画俳優になつて自活しようと思つた。兄さんはいつか、進には俳優の天分があるやうだね、と言つた事がある。それをハッキリ思ひ出したのである」とあるように、以前、兄に向いていると言われたことがあるからだ。俳優を目指すために「僕」は劇団を紹介してもらうが、例えば春秋座であれば、志望理由を話す際、「べつに」と答え、「その人が、春秋座、と書いて下さつたので、まっすぐにこつちへ飛び込んで来たといふわけですね？」という問いに対して、「さうです」と答えている。四月二十一日の日記に、父の不在を嘆き「ああ、誰かはつきり、僕を規定してくれまいか」とあるが、「僕」は自身の中に確固とした基盤を持たず、自分よりも権威を持つとした人物の言動を基礎として自らの位置づけや方向性を決める。

偉人の生き方や言葉を引用し、それに自分を重ねて行動指針を決

めたり考え方を形作ったりするのも、権威的な存在に自身の姿を求める基盤のなさを示しているように思われる。例えば、梶に自分の身体についてからかわれたとき、「宗教的な詩が多かつた」というヘレン・ケラーのラジオを聞き、寝る前に聖書を読んで寝る。また、「僕」は「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか」という引用から、「忘れてゐた。僕は信ずる事が薄かつた」と反省する。ベートーヴェンの「善く且つ高貴に行動する人間は唯だその事実だけに拠つても不幸に耐へ得るものだといふことを私は証拠立てたいと願ふ」という言葉を、「折れずに、進まう」と自分を鼓舞し、今後の向かう先に踏み出そうとする場面も同様である。

権威的な存在に自分のあるべき姿を重ねること、聖書をはじめとするあらゆる引用と堤康久の日記を基にして、「あとがき」にあるように「作者の幻想を、自由に書き綴つた」結果として「僕」が立ち現れることは、いずれも自分でないものを自分の中に取り入れることが共通している。後者はもちろんだが、前者も引用の一種と見えよう。これを考慮すると、本作品における「僕」の本質は引用であると言える。俳優が様々な役柄を演じるように、「僕」は自分とは異なるあらゆる顔を自分にもとする。「道化」が、ある一つの自己とは異なる装いをする事であると同時に、自己の複数化でもあるのと考えれば、引用と「道化」は俳優をつなぎ目にして接続されるのではないか。

このような「僕」が「磐の上に、小さい家を築かう」と述べ、自

身の基盤を確立することを明言する。しかしその日の日記のあり方が、あらゆるものの引用から成り立っていることを忘れてはならない。ここでされた宣言は、「僕」にとつての揺らぎのない基盤を築くことであり、それは、あらゆる顔に扮装する俳優としての、そして「道化」としての自己であろう。「単純に、正直に行動しよう」と素直さを志すことが書かれるが、ここでの素直さは「道化」の素直さであり、ある種の歪みを持ったものとなる。

「さんびか」は作中にも引用されるが、冒頭と結末に引用されたものが目を引くだろう。結末の「さんびか」の引用に関して、「ねがひまつらじ」とあるので、進んで行く道の栄華を望まないといった内容になっていることが分かる。「これからの俳優人生の厳しさの覚悟として用いている」と吉田は解釈するが、これは「モットオ」の元となったマタイ伝の引用を裏返したものと捉えられる。すなわち、「悲しき面容」をするような断食において、そうした顔をしてはいけないという「道化」的な方向性が、辛くない状況にあるとき辛い表情をしてみせるといふ形で発現している。今後の俳優人生の繁栄を予期させるような喜ぶべき成果の数々に対し、「道化」の「僕」は、「自惚れてはゐない」という謙虚さを示すだけではなく、この先の成功への願望でさえも否定する。

人物としての「僕」は俳優となり、初舞台の後で道化としての自分を自覚した。結末で、「僕」は一人前の俳優となった人物「僕」は、書き手「僕」の方向性と一致したがゆえに登場しないとさえ考えられる。そう考えると、「創造の技術さへ、僕には未だおぼつかない」かっ

たととされていた「僕」は、「道化」という一つの要素を活かし、本作品を成立させる創造主としての地位を確立したとも言える。

冒頭の「さんびか」の解釈には次のような先行論がある。吉田は、冒頭の引用が「僕」によってなされた場合と、作者によってなされた場合とで分けて解釈した³⁰。日記内部にはなく、初日の日記とは独立していることから、萬所は、「作者がエビグラフとして付した」ものとし、「僕」の決意」を先取りしていると論じる³¹。同じく西田は、作者に属するものとした上で「素直に自立し生活人となつて行く青春像」と解釈し、太宰自身の「引き裂かれた心情」であると主張する³²。

「さんびか第百五十九」は、初日の日記が書かれる前に付されたため、ひとまず「僕」を書き手としていないと考えてみよう。「僕」の日記の後の「あとがき」にある「太宰治」という署名から、『正義と微笑』を書いた「作者」自身を冒頭の「さんびか」の書き手として仮定してみるとどうだろうか。

「あとがき」には、この作品が「T君の、少年時代の日記帳」を基に、「作者の幻想を、自由に書き綴つた小説である」こと、医師に静養を勧められたが多くの仕事をしたこと、「作者のからだは、仕事をすればする程、丈夫になるらしい」ことが述べられている。「さんびか」にある「わがあしかよはく」は、「あとがき」に書かれた作者の健康状態を指していると考えられる。「たのしきしらべ」は「机上空想の産物」、すなわちここでは作家が小説を書けば（＝「仕事」）、「ききていさみたつ ひとこそあらめ」ということになるのではなから

うか。「ききていさみたつひと」は、先行研究にあるように時局と照らし合わせれば「兵士」ととらえられるかもしれない³³。しかし「兵士」に限定するのではなく、これから語られる作品の読者と捉えても良いだろう。本作品を彩る引用によって、読者への自由な作品受容を示唆しているのではないか。

おわりに

本稿では、これまで先行研究で中心的に論じられてきた「微笑もて正義を為せ!」という「モットオ」の解釈をはじめとして、本作品の特徴である引用に注目し、作品自体への影響や引用されたもの自体への影響について考察した。「僕」の日記に引用された聖書は利用されるだけでなく、引用されることによって、その言葉自体の広がりの可能性を提示されていた。「僕」の日記と聖書の引用との関係は相互的だが、具体的な意味内容を差し出さない本作品において、ここでのあらゆる意味付けを行うのは読者の手に委ねられている。また、「僕」に焦点化したとき、タイトルにもなっている「モットオ」は、「道化」への志向性が示されていることを確認した。これは、俳優業や「僕」の基盤のなさとも関係がある³⁴。結末で、駆け出しの俳優として輝かしい成果を得たときに、「さんびか」が引用されるのは、「僕」が「道化」としての自己表明である。「道化」は本作品に限定されたモチーフではなく、『人間失格』以降まで紡がれたものであった。

『正義と微笑』は、結末で作中の「僕」が至る「道化」というあり方をタイトルで示していたが、それ以外を読み取ることは読者に大きく譲られているところである。他者の日記や言葉を引用し、それらが広がっていくことが示され、読者による実行が勧められた作品であるものの、この断片性は日記という形式の本物らしさによって隠されている。

(たなか ほなみ・人文学専攻)

【注】

- 1 堤重久『太宰治との七年間』（一九六九・三、筑摩書房）には、「弟が、日記をかいていましたね」「十五、六のときからかきだして、現在十九歳なんですがね、七冊ぐらいになっているんです。わりあい、面白いもんなんですが」と言った堤重久に対して、「じゃあ、一度、拝見させて貰おうかな。うん、是非、見せてくれよ」と太宰が答えたということが書かれている。
- 2 濱田千春「正義と微笑」論（『活水日文』第二二巻、一九八五・三）
- 3 島田昭男「正義と微笑」（『国文学 解釈と鑑賞』第五二巻、第六号、一九八七・六）
- 4 西田りか「正義と微笑」（『国文学 解釈と鑑賞』第五四巻、第六号、一九八九・六）
- 5 安藤宏「日記体小説をめぐる——太宰治「正義と微笑」を視点に」（『国文学 解釈と教材の研究』第四一巻、第二号、一九九六・二）
- 6 勝原晴希「地をぬう鳥——太宰治「正義と微笑」（『芸術至上主義文芸』第二三巻、一九九七・一二）
- 7 廣瀬晋也「正義と微笑」論—信と身体—」（山内祥史編『太宰治研究』

- 8 第八巻、和泉書院、二〇〇〇・六）
 - 9 萬所志保「太宰治における日記体小説——『正義と微笑』をめぐる」（『文学・語学』第一六九巻、二〇〇一・三）
 - 10 吉田咲「太宰治『正義と微笑』論」（『文藝と批評』第一一巻、第四号、二〇一一・一一）
 - 11 片木晶子「太宰治『正義と微笑』の再検討——戦時下に置き戻して」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第二七巻、二〇二一・三）
 - 12 鈴木範久・田中良彦編『対照・太宰治と聖書』（聖公会出版、二〇一四・六）。
 - 13 他に、例えば、ルカ伝二三章一八〜二一節にある「神の國は何に似たるか。我これを何に擬へん、一粒の芥子種のごとし。人これを取りて己の園に播きたれば、育ちて樹となり、空の鳥その枝に宿れり」というイエスの言葉は本作品で三度も利用される。また、『サムエル後書』の五章九〜一〇節は「ダビデの若はかくもあらうか、と思はせる」という形で、「詩編 第二二篇」の一〜八節は「暗澹。沈鬱。われ山にむかひて目をあぐ。わが扶助はいづこよりきたるや」という形で本作品に引用されている。
 - 14 佐古純一郎『太宰治の文学』（朝文社、一九九五・二）
 - 15 ジェラルド・ジュネット著・和泉涼一訳『バランステスト 第二次の文学』（水声社、一九九五・八）、四四三〜四五一頁参照
 - 16 同書四五二〜四五五頁参照
 - 17 同書四五九頁
 - 18 同書四五二頁
 - 19 同書四五三頁
- 「僕」の考え方の変化も同様に、本作品を「僕」という青年の日記らしく装い、かつ統一的な意味を取り出すことができないうものとして認識させるためにあるのではないか。本作品を実体的な青年の日記として捉えれば、以上のような不一致は考え方の変化と言えるだろう。しか

し、これが小説であり、「僕」という人物が人為的に構築されたものであると考慮すれば、「思想統一」を試みる「僕」の日記という形式を、真に迫ったものとして役立っていることはもちろんである。だがそれに加えて、一貫した思想を汲み取らせないことを目指しているのではないだろうか。

中村三春は『花のフラクタル』（翰林書房、二〇二二・一）の中で、「葉」の分析を行い「葉」の断片集積形式は、解釈を求める慣習のフレームを相対化するような、攪乱的な性質を帯びている」（一八六頁）と述べた。本作品を「僕」の「思想統一」とともに日々の出来事が記述される日記として受け取るのではなく、ランダムな日々の出来事や引用、「僕」によるそれらの利用に注目し、断片の集積として全体を見ることが、そこから統一された内容を受け取ることができないという見方ができる。その点で「葉」の系譜にあると言える。

21 結末の十二月二十九日の日記には、「まじめに努力して行くだけだ。これからは、単純に、正直に行動しよう。知らない事は、知らないと言はう。出来ない事は、出来ないと言はう。思はせ振りを棄てたならば、人生は、以外にも平坦なところらしい」とある。

22 『正義と微笑』のほかに、「狂言の神」、「虚構の春」、「創生記」、「駈込み訴へ」が挙げられる。

23 濱田前掲論文

24 島田前掲論文

25 廣瀬前掲論文

26 吉田前掲論文

27 島田前掲論文

28 吉田前掲論文

29 吉田前掲論文

30 吉田前掲論文

31 萬所前掲論文

32 西田前掲論文

33 吉田は前掲論文において、「もともと」「さんびか」は、父なる神をたてる歌である。それが、国民の父であり、神であるとされていた、天皇をたたえる歌へと、意味がずらされている」と述べているが、キリスト教という本来の文脈とは関係なしに、そこにある言葉を利用する「僕」を考慮すれば、「さんびか」の元々の役割を踏まえる必要はないと思われる。

34 基盤がないからこそ、俳優といういくつもの顔を演じることができる。とも考えられる。

本稿における『正義と微笑』の本文引用は、山内祥史編『太宰治全集』第五卷（一九九〇・二、筑摩書房）に拠る。

田中 太宰治『正義と微笑』における引用に注目して

